

自然の中に心を遊ばせて

四季おりおりの自然を楽しみ

その感動を版画と文章でみなさまにお届けします

ブル・デービッド

自然の中に心を遊ばせて

第一章 「夏の川」

秘密の場所三つーその四季
版画と共に楽しむ、静かな冒険物語

文／版画：デービッド・ブル
訳：石崎貞子

Copyright © 2007 David Bull

はじめに

まだ 自分が父親になる前なので、もうかなり以前のことになるが、私はリュックを背負ってしばしばハイキングに出かけたものだった。かつて住んでいたカナダの、とある町を取り囲む山々へ、年に何回もかけた。ひとりで行くこともあれば、友達と連れ立って行くこともあった。長い年月の間には、自分を取り巻く環境の変化もあり波があったものの、自然の中でキャンプを一度もしなかったなどという年はなかったほどである。

だが、家族を持つようになると、事情は大きく変わってしまった。「僕、ちよつと山へ行つて来るよ。数日で戻つて来るからね」その一言が出なかったのではなく、そんなせりふを言うことすら思いつかなくなっていた。それはただ、家庭生活と会社勤めが毎日を満杯にしてしまっただけのことで、意識的にリュックを背負つての山行きに終止符を打つたわけではなかった。

その後、日本に移り住むようになると、アウトドアライフはもつと私から遠のいてしまった。小高い丘（とてもじゃないが山と

は呼べない）を歩くようなことはあったものの、その辺りをもつと開拓してみたいなどという気持ちをかき立てられるようなことはなかった。歩く小道は決められているし、どこに目をやっても空き缶やタバコの空箱が転がっている。木だつて植えられたままきちんと整列して従順な姿をしている。いたるところに人の手が感じられて、とても自然な状態のようには見えないのだ。カナダの壮大な自然に慣れ親しんだ身には、日本の環境はちつとも魅力的ではなかった。

そうして数年が過ぎ、私自身の仕事はかなり整理されてきていた。英語教室に木のおもちゃ作り、日本に来て最初の数年間やってきた英訳の手直し作業。こういった仕事で目の回るような忙しさだったのだが、すべてをやめて、心静かに映画制作をするだけの生活に落ち着いていたのだ。それに加えて、ふたりの娘達は中等以後の教育をカナダで受けることにし、家を離れてしまった。そうすると、アウトドアへの思いが再び頭をもたげ、そろそろハイキングを再開してもいい頃だろうかと思うようになった。

ここで考えたのは、ハイキング休暇を特別にとつてカナダに戻つてみようか、ということだった。だが、これは保留にすることにした。私が欲しかったのは特別休暇ではなく、かつてのような生活をとり戻したかっただけなのだから。つまり、時折ちよつとのあいだ都会を離れて、開かれた自然の中で心身共にリフレッシュできる生活に戻つてみたかったのだ。じゃあ、一体どこへ？ それまで日本で見えてきた、ごちゃごちゃして人がたくさんやってくる山の小道へ？ そんなの、ご免被るなあ！

そんなことをあれこれ考えるようになった頃、私は週に二回ほど、夕方が近づく頃に長い散歩をするようになっていた。家を出ると、喧噪と密集した建物のある場所を避けながら三〜四時間歩いた。そして夕闇がせまってくる、最寄りの駅から電車に乗って家に戻った。そうしてできた散歩コースの中に、自宅から多摩川沿いを上流に向うルートがあった。多摩川は、関東平野に流れ込む前にい

くつかの深い谷を通過してゆくのだが、私はその上流で、釣り人が踏みならして作った釣り場へ向う小道を見つけた。そこをよじ上ったり、すべるように下ったりしているうちに、突然ビックリするような場所に出たのだ。そこは住宅街から大して離れた場所ではないにもかかわらず、人の気配を感じさせる形跡や物音は何もなかった。谷はとても深く、緑濃く、川の水は威勢良く水しぶきをあげていた。文明に関わるあらゆる物音が、遮断されかき消されているかのようだった。

私は、川岸にあつた大きな石にそつと腰を下ろした。都内にある自宅の近くに、こんなところがあるなんて、とても信じられなかった。気分転換をするには、もつてこいの場所じゃないか！もつとそこに居たかったのだが、あたりに夕闇がせまり空気もひんやりしてきていたので、私は仕方なく腰を上げた。そして数分後には、たかさんの乗客に混じつて、自宅方面に向う電車に揺られていた。

穏やかな川辺の風景は、家に戻り仕事に向つてからも、私の脳裏から離れようとしなかった。そして、数日後の散歩の折には、いつものまにか同じ場所に向つて歩いていたのである。例の場所に着くと腰を下ろし、静かな雰囲気とうつとりとしていた。そうこうするうちに、リュックを背負つてのハイキングが懐かしくなり、それを再開したいという強い思いに駆り立てられた。だが今回は、何年も前にしていたカナダの大自然でのハイキングとはちよつと違つた方法をとつてみようと考えた。長い距離を歩くのではなく、ひとつの場所にじつと留まつてみたらどうだろう。ここにテントと必要最小限の物を持ち込んで、そうだ、ここに一昼夜、はつきりとした目的は持たずに、ただ静かにこの場所に心を遊ばせてみよう。ほとんど動かず、この場所特有の雰囲気を感じ取り満喫しよう。そうしたら、ここに暮らす生き物が見られるだろうし、二十四時間に一体何が起きるか観察できるじゃないか。

そんなことを考えているうちに、ちよつとした閃きがあり、プ

ランは更に展開を続けた。一回こっきりでなく他の季節にもその場所に戻り、同じようにひと所に居続けてみたら、どんな変化が観察できるだろうか。今は初夏だけれど、木々に茂る葉の色が変化して落葉が始まったら、まったく別の面が現れるんじゃないだろうか。冬にも同じ事が……そして春にも……

こう考えてくるともう、私ははやる気持ちを押さえきれなくなり、数日後には準備を始めてしまった。幸い、アウトドア用品を扱う店は家の近くにあつて、かなり広範囲な商品を取り揃えているから、いくつか基本的な道具を取り揃えてみよう。小さなテントと寝袋、それに、ちよつとした料理道具。

こんな準備をしているうちに、また次のアイデアが浮かんでしまった。川辺でキャンプをしたりしている間には、きつと面白い事がたくさん起こるだろう。範囲を広げて、まったく違う他の場所でも試してみたらどうだろうか？ 森の中とか海辺など、川辺とは環境の違う場所にもきつと、私だけの静かな場所を見付けられるのではないだろうか？ それぞれの場所で過ごす時間のリズムは、きつと大きく変化することだろうし、季節の移ろいもたらず違いも、きつとはつきり見えてくるだろう。

ノートを携えてゆき、見た事やその感動を書き留めてみたら……そうしたら、辺りを見る目もつと冴えてくるかもしれない、そして、面白い読み物が書けるかもしれない。

「自然の中に心を遊ばせて」と題する企画は、こんなことから徐々に形を成していった。私は、家の近くにある川辺に加えて、この目的にふさわしい静かな森の木立と海岸沿いの入り江を探し出した。こういつた場所は、どれも「広大な自然」とは縁遠いものの、自宅からほどほどの距離にあり、市街地からは完全に隔離されていて、ひっそり自然を味わえる環境を備えている。

一年の季節の移り変わりと共に、これら三か所のどこにも四回
ずつ行くつもりだ。のんびり一昼夜留まっている間に、どんな物を
目にし、どんな発見があるのだろうか。退屈してしまうか、あるい
は、またとない貴重な体験をするのか。この本は、これらの心安ま
る場所で無心に時を過ごす私の体験を綴る記録集となるだろう。今
は六月半ば、まもなく太陽が照りつける夏がやってくることだろう。
冒険を始めるには最高の季節である。さあ、準備はほぼ整った。川
辺の僕の場所が待っているぞ……



第一章

夏の川

小さな

駅を降りて五分程歩くと、道路の片側に踏みならたどり着く。この小道に気付く行人は、まずないだろう。たぶん地元の人だけが知っているルートで、しかもあまり頻繁に通ることはないと思われる。その小道は、とても急なのだが、幸い距離は短い。こんな風にリュックを担いで歩いたのは、もう何年も前のことなので、ちよつと足下がおぼつかないが、すぐに下までたどり着く。そこは、どんと鎮座した大きなつごつ岩の上になっている。下草もなく、川の一部を広く見渡せる場所になっている。

一連の小さな冒険物語を書き始めるのに、自分の思うように場所をデザインするとしても、これ以上うまくはできないだろう。谷は深く、壁面は急傾斜でこんもりと木が茂っている。空を見渡すには、大きく首を傾げなくてはならないほどである。目の前の川は、歩いて通れるほどの浅瀬もあれば神秘的なまでに深さをたたえているところもある。緑に覆われた谷の壁面に沿って、様々な姿を見せながら流れている。緩やかになったり急になったり、のらりくらりしているかと思えば荒々しくもなる、というように。対岸には、砂利が幅広く堆積して土手を作っている。おそらく台風季節に流れが運んで作ったものだろう。一方、私が今立っている側は様相がま

るで違う。大きな石ばかりで、丸みをおびているものもあるし、崖から崩れ落ちてきたようなものもある。こうした岩がゴロゴロしている間に、かろうじて TENT を張れる程度の小さな平地があり、どうやらキャンプをするにはピッタリな場所らしい。湿気を避ける程度の高さはあるし、夜中に倒れ落ちてくる危険性のある古木が頭上ではたいていいるわけなし、しかも、両側にある大きくて角のとれた石が風を遮ってくれそうだ。また、なによりご機嫌なのは、僕の方角感覚が川の湾曲でずれたりしていなければ、早朝の太陽が真っすぐ TENT に降り注ぐはずという点である。

TENT を張るのにかかったのは、ほんの数分。今回の探検にちよつと良いタイプを選んだようだ。これは二三人用で、ひとりで使うのにはちよつと大きめだが、これを担いであちこち移動することはないので、運搬の便よりも内部の広さを優先した。TENT を張り終えると、リュックを中に放り込んで、我が新王国をパトロールするため川の端の方へ歩き出す。私は、自分の性格を飲み込んでいるので、このキャンプを計画する時点で、いくつかの行動に関する基本ルールを決めていた。こんなに面白い場所に行ったら、まず間違はなく夢中で近辺を観察し回ることになってしまうだろう。岩に登って曲がりくねって流れてくる川の向こうを見渡してみたり、あつちにある木立を調べてみたり……見ておきたい物だらけで、気が付けば動き回ってばかりいて、結局は本来の目的であるところの、ひとりをゆつたり楽しむチャンスを失ってしまうことになる。そこで自分に、「十メートルの規則」を課することを考えた。つまり、TENT のある場所からそれ以上離れないという規則である。川がその先で曲がったら、どんなに面白い光景が見られそうでも前に進まず、その曲がり角にあるだけの物を見る。だが、あまり窮屈に縛るのもちよつと馬鹿げているようにも思えるので、ちよつと妥協案を編み出した。その辺り一帯の初期調査だけはすることにしたのである。

見逃してはならない何かを見損なうことはないと確信を持てるようにし、それが済んだらキャンプをする場所のすぐ近くに行動を制限することにした。

地図を見ると分かるが、このあたりを流れる多摩川は真つすぐな部分とS状に曲がる部分とを交互に進む。私がキャンプをする場所は大きなS状カーブの一部にあたり、向かって右から川が流れてくるのだが、高さのある切り立った岩に阻まれて急カーブを切り、ほとんどUターンする形となる。そのあとはゆるやかに進み、深くて丸い池のようになった大淵の中をぐるぐると渦巻くように回転し続ける。この淵の出口は、そこに突き出た巨大な切り立った岩で塞がれているので、「捕われた」場を出ようとするとする水は、狭いところを身体を押しつぶすかのようにして抜けて行かなくてはならない。やっとそこを抜けると、流れは再び百メートルほど直進し、背丈のある草が茂った礫帯の間の浅瀬を、急な勢いで川底にぶつかりながら下って行く。この直進コースの途中で右側から小さな流れが合流し、坂の終わりにくると、高い崖に囲まれて青々と水を湛える深い大淵へと流れ込む。その中の水は崖に沿って少しづつ右に流れ、やがて私の視界の外へと消えて行く。

私は川岸に転がっているいくつもの大きな石を順によじ登り、高く切り立った大岩まで這い上がる。すると、翌日を過ごす我が家の辺り一帯が見渡せる。今は昼下がりでだから、すべてが計画通りに進んで明日の夕方ここを出るとすれば、二十四時間以上をここで過ごすことになる。幾分雲は多いものの、いまのところは暖かい。丸い大淵の中で絶え間なく渦状に流れる水を眺めていると、どうにも誘惑に勝てなくなつた。シャツとジーパンを脱いで突入！飛び込むと、一瞬ブルブルと鳥肌が立つ冷たさだが、感覚がなくなるほどではない。水中に潜ると、ゆるりと身体が引き込まれ、淵を大きく巡

回する柔らかな渦に流される。一回りすれば十分。ちよつと力を入れて流れから出ると、下半身を水の中に残したまま、斜面を太陽に曝している岩にのけぞる。暖かい太陽……ひんやりした水……時は私の前に大きく広がっている……とりわけ何かを考えるとすることもなく、体を投げ出して腰のあたりでピシャピシャ撥ねる水を感じる。このひと泳ぎはちよつとした清めの儀式、私の冒険の始まりである。



テントに戻って身体を乾かすと、最初の訪問者たちを迎える。それは、二本足の生き物ふた組だ。ひと組は歓迎だが、もう一方はあまり……。まずやって来たのは、上流のどこから飛んで来たのか二羽の鳥。滑るように浅瀬に着水してきて、穏やかなガーガーという小さな鳴き声を立てている。数週間前に下見にやって来た時、茶色の鴨が二羽いたが、彼らなのだろうか。一羽が相棒に向って、まるでこう言っているかのようだ。「また、あいつがやってきたぞ。こんどはテントまで持ち込んで舞い戻ってくるって言っただろう。あのぼんやりした顔つきを見りや、一目瞭然だ。あんまり長いこと、僕らのじゃまをしなけりやいんだが……」そんな心配することはないんだがなあ。ここに居るのは、ほんの短い間だけだし、そりゃあ、彼らの行動をこっそりと窺ったりして、ちよつぴりプライベートを覗いちゃうかもしれないが、何も恐れるようなことはないんだし。

次にやってきたのは、前者ほどは親しみを感ぜられない訪問者たち。市街地にほど近いところなのだから、まるで人に会わずにいられるなどとは思っていなかったものの、あまり間近に来ることは

ないだろうと高をくくっていた。ところが、おしゃべりな釣り人ふたりが、目の前の砂利が堆積してできた対岸にやってきてしまった。彼らは、おもむろに用具の準備をすると、浅瀬に釣り糸を投げ始める。やがてひとり、テントを見ながら私に向って声を掛けて来た。そして、今夜ここに泊まるつもりかと聞くのだ。あまり無愛想にするのもどんなものかと考え、ちよつとうなずいた後、アユ釣りをしているのか聞いてみる。すると首を振って、「ヤマメ。ここはね、多摩川でヤマメが一番釣れるところなんだよ。ちよつと前だけどね、ここで三十センチもあるやつを釣った人がいるのさ」と言う。潜って水の中を見ればかりだが、魚はたくさんいたものの、最大だつてせいぜい十二センチくらいだったから、ほんとかなあ。口には出さずこんなことを考えていると、まもなく彼らはちよつと離れたところに移動していく。彼らは、見える場所にいる間ずつと、川の隅々まで絶え間なく釣り糸を投じている。だが、何かを釣った様子はなく、まもなく僕は見るのをやめてしまう。曇り出していた空から霧雨が降り出し、釣り見物を止めて仮の住まいに避難することにしたからだ。新品のテントが初めての風雨にどの程度対処できるのか、じっくり観察することにしよう。

今朝早く空模様を眺めた時、雨になるかも知れないとは思っていたのだが、だからといって計画を取りやめるつもりはなく、予定通りここにやってきた。つい最近のことだが、スウェーデンから観光で日本に来た知人と一緒に東京を散策していた時、私が空を見上げて雲行きを心配すると、彼がこう言った。「悪天候なんてものはないんだよ。相応しい装備をしてないだけさ！」僕も、彼の言う通りだと思ふ。遠出は天気の良い日だけに限ることはない。太陽いっぱいの際にだけこの川を眺めていたら、この場所がほんとうはどんな風だか分らないだろうから。

「新品のテントが初めての風雨にどの程度対処できるのか、じっくり観察」と言ったのは、この程度の軽い雨なら、まず湿気を通す

ことはないと自信があつたからである。中に座つて布に当たる雨粒の音を聞いていると、ボーイスカウトに入つていた時に使つていた分厚くて重いキャンバス地でできたテントを思い出す。雨が降つてくる時は、中に入つていてもあまり心地は良くなかつた。雨粒が布に当たる度に内側に霧状の飛沫が飛んで、うっかり指先でテントを突きでもしようものなら、すぐにそこから水が滴り落ちて一晩中その状態が続くのだつた！ 当時からすれば、テントの質は格段に向上している。中でも大きな進歩は、テントにフライシートが加わるようになったこと。テント自体は薄くてデリケートな素材で作られていて、それを軽量で柔軟性のあるポールで支える形式になっている。そのインナーテントに接触することなく全体をすっぽり覆うのが、内側よりも少し重い素材でできた撥水性の外膜（フライシート）で、それがほとんどの雨をはじいてしまう。インナーテントとフライシートの間にある空気は断熱と空調の両方の役割を果たすので、テントの内部は太陽が照りつける時に涼しく、寒い気候の時には暖かく保たれる。

雨が降つている間に、持つて来た物を出して部屋に置くことにしよう。エアーマットを敷いて寝袋を広げ、料理道具と食料を並べる。どれも新品ばかりだ。今までは使い古した物ばかり使つていたので、きれいですっきりした道具に囲まれてみると、ちよつと落ち着かない気分。なんだかキャンプ雑誌向けの宣伝をしているみたいだ！ 満足のいくように並べ終わると、雨音を聞きながらマットの上にごろりと仰向けになる。居心地は満点、最初のキャンプに今日を選んだことは、ちよつとも後悔していない。

まもなく、何年も前に体験したことだが、すつかり忘れていたあることを思い出す。薄い生地を寄せ集めて作られた、こんな単純なテントでさえも、自分の置かれた状況を大きく変化させてしまうというのである。このシェルターの中になると、目が見えなくなつた人みたいに聴覚の支配力が絶大になつてくる。自分を取り囲む環

境を布がすっかり遮ってしまい、木の葉を揺する風や落ちてくる雨粒など、音だけがテントの壁を通して聞こえてくるからである。普通の状態ならば、視覚の支配力があまりに大きいので他の器官から伝わってくる情報がほとんど無視されてしまい、目が伝達する内容に付随する背景的な役割しか果たさない。今日この谷間に来たとき、私は絶えず辺りを観察していた。あそこやここに何があるとか、これやあれやが動いているとか、私の目は休むことなく自分に情報を送り続けていた。ところが今は薄いナイロンで目隠しをされ、ほんの少し前まであった感覚を失ってしまったことに気付く。キャンプ地のすぐ脇をうねるように飛沫をあげながら流れる水を見ている時には、単純にひとまとまりに聞こえてくる「音」だったのが、今は、いくつもの楽器で演奏されているかのようにメドレーとなつて響いてくる。手前のどこかで大きな岩にぶつかつてしぶきをあげながらくだけ散る音、離れたどこかで障害物に阻まれて渦を巻きゴボゴボと吸い込まれるような音。また他のどこかからは、きつと小石の多い浅瀬を流れているのだろう、サラサラという音。他にも、どこから出ているのか分からない音がたくさん聞こえてくる。まるで、人でいっぱいになつた広いパーティー会場にでもいるみたいだ。まず聞こえてくるのは、ザワザワとまとまと聞こえてくるおしゃべりの音。でも、目を閉じて（閉じなくちゃいけないだろうか？）耳を澄ますと、ひとつひとつの会話に波長を合わせてゆける。盲目の人たちが生きている豊かな聴覚の世界をかいま見るかのようだ。視力を失わずに、この高度な聴覚を発達させることはできないものだろうか。目の支配力つてそんなに強力であり続けるのだろうか。

こんなことをぼんやり考えていると、テントにぶつかる雨粒の音が変わつてきていることに気付く。テントの外に這い出てみると、夕立後のひんやりした空気がさつと肌をなでる。こんなに短い間しか降っていないのに、いくつもの大岩から放出されていた温もりは洗い流されてしまい、私は再び長袖シャツにジーパンという姿に戻っていた。日暮れが近付いている。

ここに来たばかりの時は、あまり気にならなかつたのだが、自分の周りを軽やかにすいすい飛び交うたくさんの鳥たちが目立ち始めた。日中の一番暑い時間が過ぎて活動的になつたのか、あるいは昆虫がたくさん動き出して、鳥たちがいろいろな味を楽しめるスモークボードを提供することになつたのかもしれない。ここには随分と色々な鳥がいる。羽の色は黄色だったり青だったり、とても小さい鳥もいれば大きなものもある。私にはまるで名前が分からない。鳥の本を持つてきて名前を調べようかとも思ったのだが、それはしないことにした。本に夢中になつて実際の様子を見なくなつてしまふそうだし、鳥の名前が分かつたところで、どうということはないと考えたからだ。本などなくても分類表示は簡単、「あれは『赤口ツツキ』、こつちは『チビ羽バタバタ』、そこにいるのは『白帯オレオクツキ』」だ。

鳥たちが何やら忙しそうに飛び回つているのを眺めているだけで満足してしまうなんて、単純すぎるだろうか。これを読んでいる人の中には、私がこの川辺で見ているのがどんな鳥か、知りたく思っている人がいるかも知れないが、そんなことを調べていたら今回の「使命」が果たせなくなつてしまう。私は、知識を身に付けるのはくだらないことだなどとは思っていない。ちよつと鳥のことを知っている人たちなら、名前を特定できたときには、それなりの満足感が得られることだろう。でも私のように、空から急降下してアクロバットを披露してくれる鳥を見ながら、ただ「あつ、スゴイッ！」と叫ぶだけの者にだつて、そのスリルは十分味わえると思うのだ。

また、こういった鳥たちからすれば、僕は今晚この場を共有する他の動物たちとなんら違いはないはずだ。僕が彼らを見るように、彼らの方でもこつちを観察しているはずで、分類などに関係なく、きつとこんな風私を見ていることだろう。「青足バックパッカーだよ。この類いを見るのは、今シーズン初めてだなあ」と。不思議

なことに、こんなふうを考えていると、急に鳥たちが見えなくなつてしまった。まだ鳴き声は、辺りから聞こえてくるのだが、空中を飛ぶ姿はまるで見えない。もつとよく見渡そうと、首を捻つて上方を眺める。すると、崖の縁に生えている木の梢ほどの高さのところ、谷に沿つて飛んでいる大きな鷹のような鳥が見えた。羽を大きく広げ、翼の両端は長い指のように突き出ている。方向を変えたり旋回したり、気流に乗つてゆつたりと飛翔を調整している。頭は下に突き出し、流れに乗りながらあちこちを見渡している。きつと捕まえられそうな獲物を探しているのだろう。それにしても、どうして小鳥たちはこんなにもサツと消えてしまったのだろう。この大きな鳥に捕まえられるからだろうか。そんなこと、しようもしないだろうし、できもしないと思うのだが……。浅瀬にいる魚か、あるいは茂みに隠れているネズミを狙っているのに違いない。だが、やはりそうだったのか、大きな鳥が右の方に旋回して視界から去つてしまうと、すぐに小鳥たちが再び飛び交い始め、饗宴の続きに戻つた。

私の思いも食物の方へとなびく。もうそろそろ、良い頃じゃないだろうか。コンロを取り出して料理を始めようか？ それにしても、一体何時頃なんだろうか。腕時計は持つていない。時間を決めて待ち合わせをすることはほとんどないので、普段から使わない主義だ。だが、まるで時刻を無視した生活をしているなどという印象を持たれたとしたら、それは誤解である。工房で作業をしている時はたいていラジオをつけていて、そこに表示される時刻をしよつちゆう見ている。聞こうと思つていては、番組を逃さないようにするためだ。それに、家で仕事をしている日には、時間通りきちんと昼食も夕食も摂る。だがここには、そんなラジオもない。そうだ、単純じゃないか。夕食の時間かどうかは腹時計に聞いてみればいいんだ。ふむ、なんだかはつきりしない。何年ものあいだ、お腹よりも時計の針に合わせて食事をしてきたものだから、時を測る道具がなくて空腹かどうかも分からない！

となると、可能性として考えられる解答はひとつで、否。食事の時間ではない。はつきり空腹と感じなければ、まだ食事をする時ではないはず。食べることは、しばらく忘れることにしよう。時がくれば胃の方が知らせてくるだろうから。それにしても時間が分からないと、心許ないような落ち着かないような気分だ。これは認めざるを得ない。

こんなことを思い巡らしている時、辺りにいる生き物たちの行動に、またひとつ変化が起きる。今私が座っている岩のすぐ近くの水面に、小さな昆虫が雲のように大きな群をなして現れた。その集団を構成する黒いゴマ粒くらいの体は、どれも瞬間ごとに狂ったように急激に方向を変えながら、つむじ風のようにぐるぐる動いていて、群全体は常に移動している。僕がここにいるので、群に突入してきて仲間をかすめ取ろうとする鳥から守っているのだと思うが、連中はそんなことを考えちゃいないだろう。一体どうして、こんなダンスを踊るのだろうか。鷹が谷に沿つて飛ぶ目的は分かっているつもりだし……。辺りを飛び交う鳥たちが何をしているのかも分かっている……。でもこの昆虫は、どうしてこんな無茶苦茶みたいなダンスを踊るのだろうか。彼らも夕飯を食べているのかなあ。僕に見えないくらい小さな餌があるのかもしれない。

ま、彼らの行動がどうあれ、なかなか見応えがあるじゃないか。彼らに比べたら、僕は静けさと安らかさの手本みたいに見えることだろう、少なくとも外目には。本当のところ、もしも僕の頭の中が見えたら、それこそあの群みたいだろうに。ブンブン、グルグル、一瞬たりとも静止していない……。今は、これ以上深く考えたくない。ふむ……。きつとお腹が空いているんだ。夕飯にしよう！



私がボーイスカウトに入っていた頃に比べて、大きく変化したのはテントだけではない。当時、料理をするといえばまず焚き火だった。(薪に火が付いて燃え出さなければ、何も始まらなかった。)だがここにいる間、私は焚き火をしないつもりだ。水辺なのだから火災の危険はほとんどないが、いくら燃やす量が少なくても、この僕の砂浜に黒い残骸を残すなんて耐えられないのだ。どんな汚れを残しても、ちよつと強い雨が降れば、みんな洗い流してしまうことだろうが。「古き良き時代」などと言うが、あの頃の僕たちの振る舞いを思い出すと、恥ずかしくて身震いをしてしまう。新参者の木こりとなった僕たち連隊は、手に手に長柄斧や手斧やシャベルを持って、それぞれの野営地に繰り出したものだった。目に入るものは片っ端からめつた切りにして刻み、テーブルやベンチを作り、焚き火用の穴も掘り……猛攻撃を受けた場所が、森として再生するまでには、きつと何年もかかったことだろう。もう今のボーイスカウトは、そんなことをしてはいないと思う。もつと責任のある倫理規範を持つて行動しているはずだ。私も成長するにつれて、もつと自然を大事にすることを学んできたし、現在は「写真は撮っても、残すのは足跡だけ」という流儀を全面的に支持している。明日の夕方僕がここを去る時には、草が軽く倒れていて、ここで一日を過ごした僕の形跡を残すかも知れない。でも、草はすぐに起き上がって元通りになるだろう。キャンプファイアーなんて、しちやいけない。

しかし、だからといって冷たい夕飯を食べるつもりはない。私のリュックのポケットには、一辺が十センチ前後の直方体ケースに入った新品のコンロがあり、小さな紐付きのスタッフバッグに詰め込まれた鍋がふたつに缶入りLPガス燃料もある。また、両脇にある細長いポケットには専用コンテナが収納されていて、そこには飲料水が一リットル半ずつ入っている。それから小さなバッグを取り出すと、その中にはアルミパック入りの軽量小袋がふたつあり、これは今夜の夕食になるカレーとライスだ。コンロに缶入りのガスを接続してスタートボタンを押すと、カチツと音がして明るい炎が現れ

る。そして数分もすれば、鍋が湯気をたて始める。沸騰してきたら、小袋の封を開けてフリーズドライのご飯を中に入れる。五分ほどかき混ぜたら、火から下ろしてそのまま水分を吸収させる。こうしてご飯を蒸らしている間に、もう一方の鍋とカレーミックスを使って同じ工程を繰り返す。袋から出した時にはちつとも美味しそうに見えないが、ゆつくりと五分ほど暖めて本来の形を取り戻してくると食欲をそそる香りが立ち、見た目も良くなってくる。しつかり再生した熱々ご飯にカレーをかければ、夕飯の準備は完了。開始してから終了するまでの時間は十分ほどだ。当時のボーイスカウトの連中は信じないだろうが、これでマッチ一本必要ない。単純で清潔の上無い。

辺りは急に暗くなってきた。ということとは、夕飯の時間は間違っていないかったのだろう。小さなレジャーシートの上に座って背中を大きな岩の滑らかな斜面にもたせかけ、スプーンでカレーライスをひと掬いずつ、ゆつくり楽しむ。記憶の悪戯かどうか分らないが、かつてカナダでキャンプ旅行をしていた頃のフリーズドライフードに較べると、かなり美味しくなっているように感じる。それは日本製だから美味しいというよりも、むしろ、ここ十年かそこらの間に食品加工技術が進歩したからだろう。また、いつも家で摂る食事と較べると、随分と対照的だ。家では料理をする時間の方が食べる時間よりも長いのに、今夜はそれが反対になっているのだから。今後のキャンプにどんなメニューが出てくるのか、楽しみになってきた。

かなりお腹が空いていたらしい。鍋の中のカレーは跡形もないほどきれいだ。空の鍋は、小砂利と川の水を入れて揺すりながら洗う。コンロはもう冷えているのでケースに、鍋もスタッフバッグに戻すが、缶入りLPガスにはまだ今夜の仕事が残っている。焚き火をしない主義だからといって、こんな静かな夜に川辺に座る楽しみを断念したくないが、雲に覆われて月も星もない夜……心配無用。

リュックの中から別のケースを取り出す。それは、コンロが入っていたのよりもちよつと小さめだ。中にはカートリッジに接続するランタンがあり、あつという間に辺りを暖かな光で照らし始める。何年も前に僕たちが持ち運んでいたランタンと違い、大きなうなり音を立てることはなく、ちよつと離れたところから聞こえてくるさざ波の音もはつきり聞こえてくる。その明かりを、自分からちよつと離れた所に置いてみる。昆虫の大群が押し寄せてきたらいけないと思つてそうしたのだが、予想に反してそんなことはない。まだ季節が早いのだろうか、蚊の一匹すら見かけない。

ところで、先ほど言及した「川辺に座る楽しみ」についてはどうだろうか。今夜ここで何を見るのか？そして何をするのか？どんなことがここに報告できるのか？答えは順に、なし・なし・すべとなる。まず、まったく何も見えない。向かいの岸壁にそびえる高木の林は、かすかに明るい空に真っ黒な影として映っているだけ。次に、何もしていない。静かに座つて、絶え間なく流れる水の音を耳にするだけだ。そして最後に、この状態を克明に説明する術が自分にあるとしたら、今夜についてどんな報告ができるのだろうか！

この計画について娘と話をしていた時、彼女が「夜はどうするの？恐くない？」と聞いてきた。だが、キャンプ地で夜をゆつたり過ごすのがどんなものかは、なかなかうまく説明できなかった。こうして戸外にいなながら動き回る必要はなく、家に帰る必要もない。ふんわり広がるランプの光の輪の中に、快適なテントがかすかに見える。その中には柔らかなマットが敷かれ、ふわりとした寝袋が私を待っている。テントの背後を眺めると、ランプの明かりの絶えかかる端の方に、こんもりと大房のように集まっている高木が影のようにぼんやり見える。私を威嚇するのではなく、守ってくれているように……。そして、もちろん川も。暗闇の中でも変わらず、規則正しく流れ続けている。白波の軽やかにはねる音（さきほど、夕立

が降つたときにテントの中で説明したあのオーケストラ）が夜じゅう途切れることなく、眠りの背景音を奏でてくれることだろう。私を夢の世界へ誘う音枕のように。

静穏に包まれて、ひたすらじつと座つて過ごす。次にするのは……次にあるのは……次にやつて来るのは……そんなことは一切考えない。明日が私にもたらす景色や出来事についても、考えない。今回の小旅行は、これまで万事うまくいっている。そうこうするうちに、あくびが連続して出てくる。ランプを消し、小振りの懐中電灯を点けて寢床を見つけ、心地良い一日の記憶はここで途絶える。



テント

の中にいる間は、常に「盲人」のような状態になる。だから、川辺の朝がどんな風に私を目覚めさせるのか、読者は容易に想像できることだろう。そう、もちろん……鳥である。昨日は僕の方が、飛び交いながら獲物を捕ったりする彼らを観察していたのだが、温もった寝袋の中で起き上がり目をしばたいていると、彼らの方が一日の「ドラマ」の幕開けをしてくれる。それにしても、なんたる序曲だ！うるさくてたまらない！昨夜は早く床に着いていて、本当によかった。のんびり朝寝坊をするつもりで夜更かしでもしていたら、今こうして喧しく周りに群がっている連中に寛大になつていられないだろうから。

テントのフラップを持ち上げて外を窺うと、辺りは明るくなっている。灰色の曇り空だから、朝日が僕のテントに降り注ぐという期待はずれたものの、どんより重いほどの雲ではない。そして、空気はヒンヤリとしているが、肌を刺すほどの冷たさではない。昨晩眠る前に、目が覚めたら早朝のひと泳ぎでもしようかと思っていたのだが、どうやら想像していたほど魅力的な案ではなさそうだ。ま、とにかく何もせずにこうしていても仕方ない。起き上がって「何もしない」を開始しなくちゃ！

朝食も、昨日の夕飯に負けず劣らずの楽しみである。準備はほぼ同様。まずお湯を沸かし、中にミックスを入れる。が、今回はキャンプ用のフリーズドライ商品ではない。しばしば立ち寄る輸入食品を置いている店で買った、パッケージ入りの即席オートミールだ。これに、ひとつかみのレーズンとシナモンをひと振り加えれば、お腹にもたれない温かい献立となり、朝の寒さも吹き飛ばしてくれる。セーターを着て、水際にあるお気に入りになった大岩の上に座り、上流から二羽の鴨がパチャパチャ泳いでくるのを見物しながらゆつくりと食べ始める。あれは昨日見た連中じゃないだろうか。鳥というのは、雄の方が派手な色をしているから、番（つがい）の鳥はたいてい違った色をしていると思うのだが、彼らは同じような色をしている。そのカップルは僕の方に近づいては来ず、対岸に沿って移動している。流れに逆らって泳ぎながら、頻りに頭を水の中に突っ込んでいる。温かなオートミールなどではなく、めぼしい朝食用の餌がないか探しているのだろう。そのうち、私のすぐ真向かいの小さな流れが合流するところまでやってくると、一羽が浅瀬で水を跳ね上げながら支流の方に向かって、食料を探しながら移動する。数分後には、相棒も後を追って行った。こう見ていると、彼らは番にしか見えないのだが。

それにしても、どうしてあいつも一緒にいるんだろう。何週間か前にここへ来た時もそうだったし、昨日の午後も並んで行ったり来たりしていた。人間の男女が仲睦まじくなるのは容易に理解できる。「僕と結婚してくれますか……」とかなんとか言つて、「これから」一緒に暮らす決意というのが意識的になされる。また、二頭の動物が寄り添うのだから当然のこと、ホルモンに支配されているのだから。でも、こんな鳥が子孫を残すための行為が必要でない時期も一緒にいるなんて。彼らが互いを連れ合いと認識しているとか、一緒にいたらもつと安心だとか、愛し合っているとかなんて、冗談じゃない。あんなちっぽけな頭の中で、そんな複雑な感情を認識できるとは信じられない。こんなこと言い出して笑われるかも知れないが、

こう考えてくると、僕たち人間自身についても気になり出さないうるか？人間の僕は、かなり高度な知能を持つているから、ある女性と一緒にいたいと思うのは本能の導くままではなく、知的な判断が勝っているため、と信じたい。人間だもの、ホルモンの影響も受けて性的な魅力を感じることは認める。だが、朝から晩まで来る日も来る日も、僕が連れ合いと一緒に過ごしたいと願うのは、共にいる喜びがあればこそである。会話を交わし、アイデアを分かち合い、それぞれの活動を助け合い……能無しのように見える二羽の鴨にも、そんな結びつきがあつて一緒にいるのだとしたら、僕は甚だしい思い違いをしていることになっちゃうな。ひよつとして、僕と相手との関係も理性など関係してないのかも知れない。

こんな込み入ったことを考えるには、まだ頭が眠りから醒めきつてないようだ。幸せそうにやっているとカッブルには、これ以上干渉せず、そつと泳ぎ去るままにしてあげよう。気付いてみると、スプーンを口に運びながらあくびをしている。何時頃なんだろう。七時半？八時？まるで分からない。すると右の湾曲した流れの辺りから、パシャパシャ音をたてて朝一番の釣り人がやつてきた。そして、昨日来た人たちときつかり同じところに場所を決めた。ここなら誰にも会わずに過ごせると思つたのは、どうやら僕の見当違いだったらしい。幸い、今度来た人は私に話しかけることはなく、むしろそつとしておいて欲しいような気配だった。釣り道具の準備が整い、釣り糸の流れに投げ込むとすぐに、この最初のひと投げに魚が喰いついた。彼がグイと竿を持ち上げると、その獲物は辺りに水を跳ね散らしながら激しくのたうち回るが、大きく弧を描いて彼の方に引き寄せられる。六く七センチくらいだろうか、あまり大きくはない。そして、次に彼のとる行動は私に衝撃を与えた。竿の持ち手のあたりを小脇に抱え、片方の手で糸を握り、もう一方の手で魚をつかむと、釣り針からサツと引き離して砂利の上に放り投げる。続いてポケットから何かを取り出すと、釣り針にそれをひっかけて再び糸を投げる。一分もするとまた釣り上げ、同じ一連の動作を行い、魚を地面

に放る。これが何回も何回も繰り返される。やがて彼は、もつと下流に移動して見えなくなる。死んだ魚が十匹以上は地面に転がっているはずだ。

一体どんな魚を釣ったのか。もつと大きいやつだろうか、それとも違う種類だろうか。釣りをする人みんながこんなことをしていたら、この川に魚がいなくなってしまうだろう。でも、こんなことを気にしていたら、この一日が台無しになってしまう。もう考えるのはよして、朝食の片付けをしにテントの方に戻る。片付けはあつという間に終わったので、ノートと鉛筆を取り出して見たことを綴り始めることにする。座る場所には事欠かない。キャンプ地の辺りには、水に洗われて角の取れた大きな石がたくさんあつて、いろいろな複雑な形をしている。どれも椅子やソファとして使ってもらいたがつているかのようだ。僕はモダンな家具店にでもいるかのように、快適そうに見える一脚を探して歩き回る。

空は今もなお灰色の雲に一面おおわれているのだが、空気の流れはちよつと変化してきた。目覚めたばかりの時には上流から来る空気の流れをかすかに感じるだけだったが、今は風向きが反対になり、少し強くなつてそよ風のように感じる。気温はまだ上がらず、とてもセーターを脱ぎたくなるほどではない。今回は夏の話となるはずなのに……天気予報を注意しておいた方が良かったのかな。

ちよつと書いてはあくびをし、それから再びちよつと書く。座つて飛び交う鳥を観察したり景色を見渡したりしながら、ぼんやり考える。この劇に出場する役者はほとんど登場してしまつたのだろうか。見せ場は出尽くしたのだろうか。知るすべはないものの、こうして観客席に座つて、これからどうなるのか待っているだけで満足している。ところで、もう昼時だろうか？

私が今乗っている大岩は、左側が急な斜面になっていて、下の方は水の中に浸かっている。そして、この座っている位置からは大きくて深い淵がすぐ目の前に見え、この角度だと水面で反射する空からの光に遮られずに底の方まで見透すことができる。水中には数えきれない程たくさんの魚が、ほとんど動かずに漂っている。こんなにたくさん魚がここに居ることを釣り人たちは知らないのだろうか。教えてなんかやるものか！その魚を見ているうちに、光が変化してきていることに気付いた。辺りが明るくなって水の中に光が差し、魚の影が水中の岩に映っている。雲が切れて光が差してきたのかと空を見上げると、驚いたことに雲がない。空はのっぺりしていて、灰色に青みが差してきている。上空に太陽は見えない。だが、ふと向かい側にそびえる崖に目を移すと、その合間から這い上がってきた。朝日が差し込むはずだった場所、日の出だ！昼飯のことを考えていたのだが、ほんとうのところは朝の五時頃なのだろう。僕がどんよりとした曇り空だと思っていたのは、夜明け前でまだ色がなかったからなのだ。きつといい天気になるぞ。太陽いっぱい夏の一日だ！

すぐに気温が上がり始め、嬉しくなつてセーターを脱ぎ捨てる。テントの方を振り向き、キャンプをするのになんていい場所を選んだのだろうかとつくづく思う。朝日が真つすぐ室内に差し込み、夜の間にこもった内部の湿気をすつかり取り去ってくれそうだ。それに、光がほぼ水平に差しているの、森や草むらが明るい緑に満たされている。日が高くなる頃よりも、自然は明るく新鮮な輝きを見せているのだろう。

その時、不格好な虫がバタバタ暴れながら、どこからともなく僕の方に飛んで来る。急に風向きが変わってその虫はグイと投げ上げられ、次の瞬間、僕の膝の上に落ちてくる。つまもと手を伸ばすと、羽を激しくバタバタさせて僕の胸にぶつかり、そのまま飛び去る。が、どこか痛めたのだろうか。どんどん落ちてゆき、淵の水面

に落下してしまい、死に物狂いに暴れながら水の上をグルグル回っている。まるで十代の青年がモーターボートのエンジンに与圧をかけて走らせているかのようだ。水面から離れられない。淵の深みには、たくさん魚が徘徊しているのに、水面はそつちに向かつてゆつくりと流れ、激しく暴れ回る彼を流してゆく。ちよつとしたドラマが見られるかも知れないぞ。サメのジョーズが深海から躍り出て獲物をパクリか！暴れる虫は、危険地帯に引き込まれる。だが、魚はまるで気付かないらしく、行動を起こさない。次の一瞬、ひと吹き風が水面を動かして虫を川岸へと押しやる。彼は水から逃れて岸によじ上り、茂みの中へ大急ぎで走り込む……視界から消え……セーフ。

それにしても、どうして魚は虫を捕まえようとしなかったのだろうか？川の本流では魚が獲物を捉える様子を示す水跳ねや波紋が頻繁に見られるのに、ここにいる怠け者たちは、もう腹いっぱい食べて淵の底でのんびり日向ぼっこでもしているのだろうか。きつと魚は、水が流れているところだけ餌をとるのかもしれない。釣り人たちが淵の方に来なかったのは、それを知っていたからかも知れない。目を凝らして良く見ると、たくさん小さな昆虫が水面でスケートをしているみたいに見えるが、魚はまるで関心を示さない。魚の捕食習性には、まだまだ複雑なことがあるようだ。ここで食料を調達する予定にしないで良かった！

突然、白く冴えた何かが見界に入る。見たことのない鳥が僕の冒険に加わった。サギの名前がいくつか頭をよぎる。その鳥は細くてばか長い二本の足をぶらぶらさせながら、のんびりと大きく羽ばたいて空中を移動する。残念なことに、僕の近くに着地しないことにしたらしい。高度を保ちながら川の流れに沿って進み、湾曲する地点を過ぎて見えなくなりました。ところで、僕がここにいるとどのくらい辺りの生き物の行動に影響を与えるのだろうか。彼らが人間を見慣れていることは間違いないはず。大都市の騒音や気配

が感じられないからといって、実際はその中心地にいるということ
を忘れてはいけない。二分も歩けば住宅地に入るのだし、もう二分
進めば駅がある。人間を嫌う鳥や動物ならこの辺りには生息しない
はずだ。だが、と同時に、彼らは程よい距離を保つことも知っている
のだろう。

私は深く腰を落ち着けて、川の流れを見つめる。なんだか、部
屋でテレビを見ているような感じだ。他の誰かと話をしていても、
そこに映る動画像は人の目を画面に戻そうとし続ける。川も同じこ
とをしている。私の背後ほんの数メートル先は木が生い茂った丘の
斜面になつていて、面白い発見がいっぱい隠れていることだろう。
ところが、水の動きで常にその関心が逸らされてしまう。川は瞬時
も止まらず動き続け、しかもその動きは変化することがない。水は
「波」のようにうねりながら、座っている僕の右側から左へと流れ、
その山となる部分のすぐ下には、じつと動かない石がある。流れは
ゆるゆらと振動し続け、常に一定の波形を保っている。大海原に生
まれる波の場合は、水が流れてできるのではなく、波を作るエネル
ギーが水の上下運動を引き起こすためだと思う。しかしここでは、
まったく反対のことが起きている。水は絶え間なく動くのだが、波
そのものは一定なのだ。キャンプファイアーを諦めるために、僕は
闇夜にゆらめく炎を見つめる楽しみを代償としなければならなかつ
たが、こうして神秘的な水の動きを眺めていると、それを補って余
り有る気がしてくる。

ところで、水位は一日の間にとどのくらい変化するのだろうか。
あの岸壁には、現在の水位からほぼメートルほどの位置に、そこ
まで水があつた跡を示すような線が見えていて、そこから下にはわ
ずかに小さな植物が生育しているだけである。きつと台風などで大
雨が降ったときに水位が上がったのだろう。そして、あそこに見え
る帯状に広がる砂利地も川の流れが作ったものだろう。確実に面積

を広げているらしい礫帯もある。他の季節に再びやって来たら、きつ
と随分と違う様相を呈していることだろう。

初めてここに来た時、たっぷりの水量で勢いよく流れる川の姿
にちよつと驚いたことを思い出す。多摩川は下流になると都市部を
流れていて、場所によっては足を濡らさずに渡れるくらい勢いが衰
え弱々しくなっている。だから、ここ上流はもつと小さな川だろう
と想像していた。だが、忘れていたことがあつた。それは、都民の
水源としてたくさんの方が途中で吸い取られ、そのあと玉川上水路
にも分水しているということだ。ここまで上流に来れば、まだそう
いった取水がなされていない状態なので、たっぷりとした水量をた
たえている。この下流域に住み、「自分たちの」川に何が起きて
いるのかを知る人は、どれほどいることだろうか。

太陽はゆつくり昇つてゆき、石から熱が放射され始める。僕は
別の大岩に移り、ちよつと座つて空想に耽る。ぼんやりと水の中を
覗いてみたり、森の方を見上げてみたり。こう書いてくると、ただ
ぼおつとしているようだが、飽きてしまうようなことはまるでない。
僕の体を見ても、何の変化も起きていないだろうと思うが、内面の
思考速度と精神活動は明らかにゆつたりとじてきている。都会にあ
る自宅にいる時には、じつとしているとか何もせずにいるなどとい
うことは少しの間もできない。ひとつのことが終わると、自動的に
次にすることを見つけている。目前に迫った仕事があれば本や新
聞に手を伸ばすか、あるいは立ち上がって探検を始める。
ところがここでは、そんな衝動はまったく起こらず、じつと座つて
いるだけで十分満足なのだ。時がゆつたり流れていく。



日が高くなり（昼時に近いことは確かだろう！）、斜面になっている向かいの壁面は暗い陰になった。この暗幕が背景になって、たぐさんのとても小さな光が踊っているように見える。暖かくなっている礫帯の上を飛んでいる昆虫に、真上から太陽の光が当たっているのだ。きつと鳥にもこの光が見えるのだろう、祝宴が開かれているかのように見える。ほぼ一分おきくらいに、動いている光に向かって飛ぶ鳥がいるのだ。驚いたことに鳥は昆虫を直撃せず、まるで軽飛行機のような飛び方をする。すいすいと羽ばたいて急に上昇しては、上がり過ぎたかのようにちよつと下降し、再び高度を上げる。この動作を繰り返しながら適当な高さにまで達すると……「パクリ！」光の点は消えて、鳥は落下する爆弾のように真つすぐ地上に着地する。そして僕は、次に続く演技を待つ。

もうかなり暖かくなってきた、太陽の下にしていると汗ばんでくる。足下の石に触ると熱いくらいで、向かって左側にある淵は深い緑色をたたえて、僕を手招きしているかのようだ。朝から待ち望んでいた泳ぎを開始してもいい頃だろう。リュックの中から持ってきた水中眼鏡を取り出し、水泳パンツを履いて淵の中にすうつと潜る。キャンプをしている場所を取り囲む壁面の岩肌は、ほとんどがギザギザ、ゴツゴツしているのだが、その間になめらかで明るい色の面が混じっている。そういつた様々な岩肌が、ひとたび水中に潜ると、ものすごく神秘的で美しく見える。水中まで差し込む太陽の光いつぱいの中を泳ぐと、自分の影が底に映り、屈かない岩の隙間の奥の方まで僕の代わりに探検しているかのようだ。

ここには魚がたくさんいる。どれも僕のことを近くまで寄せ付けられないので、どの方向に泳いでも逃げて行く魚の尾ひればかりを見ることがなる。ふと、ちよつと離れた底の方で何か動くのに気付く。そつちを向くと、魚の形をした長くて黒っぽい物は岩の間の深みに潜ってしまい、尾ひれだけが見える。三十センチくらいあるだろうか、水中ではなかなかはつきりと目測できない。そうか、昨日

釣りにきた人が言っていたのは本当なのだ！ここには大物がいるんだ。追跡を続けたが苦しくなって、息を吸うために水面に顔を出す。急いで潜り直したが、魚の姿を見失ってしまった。釣り人たちが来る日も来る日も捉えようとしているのに、こんなに大きくなるまで生き延びたとは、何て素晴らしいことだろう。これほど大きくなるのだから、さぞやたくさん食べてきたことだろうが、危険な餌とそうでないのを見分ける力を身に付けているのだろうか。魚にそんな知恵が働くものだろうか？そんなこと、とても信じられないが、事実こうして生き延びているのを見ると……彼の幸運を祈って、これ以上邪魔をしないことにしよう。

本流に移動して、ゆったり流れに身をまかせ。かなり進んだところで、ちよつと岸に近づくと、その流れは反対方向になっていて、僕を「家」まで運んでくれる。ぐるりぐるり、あちらへこちらへ、まるで流される木の葉のようだ。十分遊んだところで岸に上がり、体についた水を軽くはいたら、リュックの中から袋を取り出してマフィンと紅茶の昼食をとる。そのあとはテントの中のマットで眠ってしまう。怠けきった一日が、どこまでも続く……。



どのくらい眠ったのだろうか十分？一時間？まるで見当がつかない。まだかなり暑いので、再び水の中に滑り込むことにする。今度は、着るものなど気にしない。というのは、今日は早朝にひとり釣り人がやってきた他は、誰も来ていないからだ。水に入るのに何かを身につけるなんて、まったくばかげているように思える。どんなに小さな水着だって、泳ぎ心地はゼロに勝らない。裸で水の中を漂うと、この方が自然な状態のように感じる。こんなことめつたに

できないから、ちよつぱり違和感があるのだろう。それにしても、ここを住処にしている魚たちからすれば、僕は何てヘンテコでぎこちない白魚（シロザカナ）に見えることだろう。白……だがこの色は、今日の強い太陽の下ですぐに赤く変色する。たつぷり泳いだらショートパンツを履き、これ以上肩を日焼けで痛めないようにTシャツも着る。そして、表面が滑らかな岩を見つけて体を横たえる。

心地よく背をもたせかけた丁度そのとき、この辺りに住むもうひとつの驚くべき生き物が、自分の存在を主張するかのごとく出現した。僕の太ももに小さな昆虫が着地する感触があり、ふと見ると、細くて折れ曲がった足に縞模様まである。てつきり蚊だと思い、叩いてつぶそうとする。が、その直前、目に入った刺激が脳にストツプをかけた。つぶしてしまう代わりに、そおつと指に飛び乗らせてみる。それは、蚊と見紛うくらい小さなカマキリだった。自宅近くにある草むらや花のまわりには、たくさん面白い昆虫がいるのだが、こんなに小さなカマキリは見たことがない。体の形は、大きいものとまるで同じようだ。前脚が鎌のように折れ曲がり、残りの脚は細長い。そして三角形の頭が棒切れのような体からニョッキり突き出ている。子供なのか、あるいはこういった種類なのか、まるで分からない。僕たちはそこに座って、互いに見つめ合う。砂粒ほどしかないはずの小さな脳味噌に、一体どんな思いが駆け巡っているのだろう。思考しているのだろうか？ 僕のことを考えてるのだろうか。お互いしつかり見合っていると、時折チビ頭をあちらこちらへ傾ける。「にらめっこしましょう」とでも、やっっているみたいで、僕は我慢できずに大声で笑い出してしまう。勝負あったり、彼の勝ち！ 遊んだ後は、あとで踏み潰したりしないよう、彼をそおつと近くの茂みに移してやる。秋に戻ってきたら、きつとまた彼に会えるだろうか。

テントに戻ると、太陽が背後に移動して陰になっている。そして、対岸に陽の光が降り注いでいる。影は随分と長くなってきた。ゆつ

たりと穏やかな一日を過ごしながら、まるで念頭になかったことを、そろそろ考えなくてはならない時らしい。ここを去って家に戻ることだ。弾力に富んだ小さなナイロン性の仮住まいでなく、僕の本当の家に戻らなくては。

だが、急ぐことはない。まだ荷物をまとめる気分じゃない。更なる冒険が待ち構えていないとも限らないじゃないか。こんなことを考えているちよつぱりその時、そう、起こった！ 昨日の午後に見かけた驚（たぶん鷹だろう）だ。今日もずうつと僕と一緒に、川に沿って上ったり下ったりして飛んでいた。時折、木立の上空で旋回するかと思えば、対岸の大きな枯れ木に止まって下を見下ろしたりする。僕も彼を観察して、一体何を捉えようとしているのか考えていた。ネズミ？ 小鳥？ 川の中の魚？ その謎を解く瞬間が、やってきた！

彼は、今までにないほど低い位置で旋回しながら、更に降下し続け、水しぶきをあげる水面ぎりぎりまで近づく。水面に接する直前、まるで着地する飛行機の機体から車輪がはじけ出るかのように足を伸ばし、サツと水中の魚をつかみ取る。魚は五センチくらいだろうか、あまり大きくない。大きく羽ばたいて再び旋回しながら高度を上げているとき、鳥はくちばしを伸ばして銀色に光を放ちながら、のたうち回る物体を突く。一瞬にして魚は動かなくなる。鳥は安定した羽ばたきを繰り返しながら、再びくちばしを下に伸ばし、サツと頭を後に戻す……銀色の光がピカッと見え、次の瞬間にはそれが消える。魚はなくなってしまった。ほんの数秒前までは、その魚にだってそれなりの未来があり、心穏やかに泳いでいたはず。なのに、今その体は屍となつて鳥の胃の中におさまり、空高く飛んでいる。すべては数秒間のできごとだった。このショーは、まだ終わりではない。

数分が過ぎる。私はテントの中に入って、ノートを片手に今見たことを綴っている。「鷹が旋回しながら降下し、……」「銀色に光る魚が……」とそのとき、外で動く物が私の目を捉えた。彼が戻ってきたのだ。再び水面を擦る動きは、数メートル先の目前で起きている。前回と同じ運びだが、今度の魚はもつと大きく、しかもはつきりと見える。餌食は激しく暴れる。だがそれも、恐ろしいくちばしの一撃を受ける直前までのこと。あつという間に、その魚の姿も消えてしまう。この軽業は、鷹が私にくれる別れのプレゼントなのだろうか。あるいは僕の姿が見えなかったもので、こんなに近くまでやってきたのだろうか。もしも私が一日中このテントの中に隠れていたなら、この川辺に住む色々な生き物たちが、もつと近くまでやってきただろうに。でも、それは贅沢というもの。みんな随分といろんな出し物を見せてくれたじゃないか。とても満足できる一日だった。きつと忘れられない夏の思い出になることだろう。このあと、秋・冬・春と続けてこの砂場に戻ってきてテントを張ると、どんなことが起きるのだろうか。わくわくして待ちきれない気分だ。まるで同じショーを見るにしろ、別のドラマが繰り広げられるにしろ、僕にとつては大差ない。

でも、それはまだ先のこと。冷たい風がだんだん強くなってきた。太陽は背後の丘の向こうにすっかり落ちてしまっているから、もうこれ以上荷造りを先延ばしにはできない。テントを畳むのはほんの数分。細々したものをリュックに詰め込み、キャンプした場所をすっかりきれいにする。小道を塞ぐ茂みをかき分けて通る前に、もう一度振り返ってその場を見渡す。足跡以外には何も残っていない。川は、誰も来なく何事もなかったかのように流れている。ひとりの男がここに二十四時間いて、立ち上がり、そして去った。その男の存在は、一羽の白いサギが川に沿って飛び、その流れが曲がると見えなくなるごとく、ほとんど周囲に影響を与えない。後を残さず、何も変えず。川は、相変わらず流れ続けている。

私は、小道を抜けて森の中へ……駅へ……そして自宅に。大満足の一日だった。

「夏の川」

絵・彫・摺：ブル・デービッド

平成十九年五月～六月

和紙：岩野市兵衛

版木：山桜（十七面）

摺：三十二回